

日英通訳訓練法と英語コミュニケーション能力との接点

鈴峯女子短期大学 田邊祐司

鈴峯女子短期大学 田邊祐司

1. 本研究の目的

通訳技能訓練法（以下通訳法）は、外国語に関する技能訓練の中で非常にハイレベルなもののひとつであろう。通訳者を志す者は、すでにSource Language (SL) 及びTarget Language (TL) に精通し、なおかつ双方の言語の背景にある社会、文化、歴史などに相当の知識、理解がある bilingual、bicultural な者であるか、もしくはいわゆる successful L2 learner かである。こういった人達が通訳訓練を受けるが、それでもその中でプロとして通用するのはごくわずかというきびしい、特殊な世界の技能としてとらえられている。こうした考え方も一面では的を得ているが、実は通訳法の中にも、一般的な外国語教育の様々な段階に応用できるものがある。ここではそのような通訳法のひとつである日英通訳法を取り上げ論考を進めることにする。

日英通訳法は大手の通訳者養成学校・機関などそれぞれ独自の長年の経験から蓄積されたノウハウがあり、その詳細な内容については受講者として多額の投資をし、学ぶ以外方法はなかったが、ここにいたって少しずつ公にされるようになってきた。この観点からの出版物も近年増え（ロンブ 1981; 小林 1982; 西村 1988; 谷本 1988; 青山 1988, 1989; 田中・ファロン 1990; 西山 1991; 日本コンベンションサービス通訳部 1991; 篠田・新崎 1991, 1992; 廣政 1992; 宮下 1992 など）、また学術的な観点からも通訳技法を取り上げるものも現れるようになってきた（近藤 1980, 1990; 大谷 1984, 1988; 八島 1985, 1988; 楠 1991; 田邊・馬本 1992; 玉井 1992; 田邊 1992b など）。また、各種の研究・講演会などでも通訳法が導入され、これを活用する講座も増加している。さらには大学で通訳講座を開講しているところも多くなっている（『通訳事典93』）。いずれの場合も通訳法がコミュニケーション能力ひいては英語運用能力を高めることを前提としている。異文化間の professional なコミュニケイターとしての通訳者がコミュニケーション能力という点において優れているのは、ある意味では当たり前のことで、その通訳者を育てる通訳法がコミュニケーション能力を向上させないはずはない。もとより筆者もこの立場をとる者であるが、どのような通訳法が、具体的に英語コミュニケーション能力のどういった側面にどう寄与するのか英語教育の観点から言及した論考はこれまで少なかった。もう少し掘り下げてみる必要があるのではなかろうか。

したがって本稿では、まず通訳法の中から基本的、代表的なものを取り上げ紹介し、次に各通訳法の technique が英語コミュニケーション能力とどうかかわっているか述べ、最後に通訳法の英語教育現場での応用の可能性について示唆することにする。なお今回の研究の目的はあくまでも通訳法の紹介、さらにはその応用の可能性を経験的、主観的に示唆するものであり、実証的研究ではないことを最初に断っておく。

2. 通訳法の実際—その内容と特徴

日英通訳訓練の指導方法には個人差があり、各講師の考え方や経験に負うところが大きい。以下ここに紹介する通訳法は、主に筆者個人がこれまで行ってきた指導法に基づくものではあるが、各種通訳訓練校での研修実績も踏まえているので、名称は違えどもおそらく代表的な方法であると言っても差し支えなからう。

(代表的な基礎通訳法)

- 1) Quick Response
- 2) Shadowing
- 3) Active Listening
- 4) Retention
- 5) Note-taking
- 6) Slash Reading
- 7) Sight Translation
- 8) Logical Analysis
- 9) Paraphrasing
- 10) Summarization
- 11) Articulation Story Telling
- 12) Describing

以上が通訳訓練の導入段階での主だった練習法である。数字はあくまで便宜的なもので必ずしも学習段階を表しているわけではないが、基本的には番号が進むにつれ学習難度が高くなっている。以下、それぞれ簡単に説明することにする。

1)のQuick Response (以下QR) は別名、反応練習と呼ばれるもので、ある情報が日本語より英語で与えられた場合、それを瞬時にそれぞれのTLのequivalentに訳す練習である。練習のフォーマットとしては、1)J (日本語) -E (英語)、2)E-Jがある。但し、初心者が対象の場合、導入の手段として時にJ-J、E-Eというパターンもしばしば行われるが、これは言ってみれば言語機能の運動神経を覚醒させるためのwarm-upのようなものである。QR練習は主に単語レベルから句レベル、文章レベルと普通、段階を追って行われる。最も一般的な手順としてはあらかじめテープにcueとなる語句を吹き込んでおき、受講者一人、一人順番を決めずに訳出させる。語句と語句の間のpauseは慣れるにしたがって短かめになるようにする。題材は中学校・高等学校で扱われる基本語彙のQRから入り、徐々に時事的な語彙を盛り込んで行くことが多いようであるが、この判断は受講者のレベルをみて指導者が決める。受講者の中には自らのQRをテープに録音し、後で再生してどのようなところでつまずいたかself-monitorする人もいる。以下は田邊(1992a)からの抜粋である。

(例) 日本語は英語に、英語は日本語に通訳しなさい。

- 1)産地直送
- 2)junk food
- 3)人工甘味料
- 4)cyclamate
- 5)レトルト食品
- 6)核融合
- 7)reprocessing plant
- 8)火力発電所
- 9)critical level
- 10)断熱材

2)のShadowingは元々、心理学の言葉であるが、今では通訳界でも広く使われるようになった。語学教育の世界でlisten and repeatという手法は古くから行われてるが、Shadowingは情報を聞きながら文字通りほぼ同時にそれを同じ言語で口頭で再生するのである。つまり、通常のrepetitionとは違い、pauseなしに次から次に聞こえてくる情報を影のごとく後について再生するのである。一般的な練習方法としては、受講者はまずJ-Jでこの練習に慣れた後、E-Eと進んで行くが、J-Jの段階でもニュース番組などの標準的な速さの再生から始めるのが普通で、さらにドラマ・朗読などの感情がこもったものを使う場合もある。E-Eの練習教材についてはListeningの問題とも直結してくるので、各指導者の個人的な判断によるが、筆者の場合は比較的スピードの遅い短文から導入することにして、受講者が慣れた段階からニュース(できるだけ新しい)やインタビューなどのfilterに通されていないものを使用している。さらに上級者の場合、実際の通訳の模様を録音したテープを扱うこともある(問題のない範囲で)。Shadowingが初めての受講者でも、1ヶ月もすればこの練習に慣れてくるようである。慣れてきた時点でリレー式に同時に4~5人の受講者に同じものをShadowしてもらうこともできるようになる。

3)のActive Listening Comprehension (ほとんどがE-J) では一般に行われている方法に従うことも多いが(即ち、dictation、穴埋め練習など)、通訳の場合、瞬間的に耳で掴んだ情報を即時

に口頭で訳出することを要求されるので、Listening練習の際にもその場で談話の流れを掴んでいるか質問したり、未知情報を予測させたり、またsense groupごとにQuick Translationを課すなど、一般的なListening練習とは違っている。指導者はその訳を聞き受講者の理解力がどの程度であるか、理解できていないところがあればそれはどのような点か、また理解できなかった原因は音声的なものか、語彙によるものか、それとも背景知識の欠如によるものかなどの大切な情報を受講者とともその場で吟味し、feedbackする。通常、教材としてはここでも時事性の高いものを使うことが多い。

4) Retention練習とは重要な情報、特に談話の中での非常に情報のウエイトの高い(情報のストレス)をできるだけ記憶させる練習であり、これには様々な練習形態がある。ここでは基本的なものを2つだけ紹介することにする。まず第一段階でよく行われるのが、ニュースなどのまとまった談話単位の情報を聞かせ、これを受講者にメモはとらず記憶させ、一定の時間をあけた後、日本語で再生させる練習方法である。慣れた時点でE-E、E-J(この段階からtranslationになる)、J-Eと段階を変えて同じ練習を続けて行く。またQR練習とも兼ね合わせながら、単語レベルからのいわゆる1語遅れ~5語遅れの再生練習をRetention訓練の一部として行うこともある。この練習の順序としてはJ-J、E-E、E-J、J-Eが一般的である。この練習により受講者は耳でとらえた情報を一旦頭の中に残し、なおかつ次の情報を聞きながら前に入れた情報を訳すという複雑な作業を経験するが、これが後の同時通訳という段階で大変役に役に立つことになる。その他、最近一般の英語の授業の中でも行われることの多い伝達ゲーム的な練習や、より高度なニュースキャスター練習などもある。

5)のNote-takingは通訳メモの取り方を学ぶ練習である。メモというところからとるような印象を持たれることが多いが、実際の通訳メモはまさしく覚え書き程度のものである。メモ練習は要するに情報の軽重を判断させ、談話のlogicからはずれないようにさせるものである。上述のRetentionと関連づけて指導されることが多い。具体的な練習の中には情報の視覚化を主体とするものが多い。

6)及び7)はほぼ同じ能力を養成するものであるが、いわゆる英語のlogicにのっとりて英文を情報単位ごとに頭からできるだけ訳出できるようにする練習法である(もちろんJ-Eも含むが力点はE-Jである)。6)のSlash Readingは情報単位、sense groupごとにslashを引かせながら、その単位ごとに訳出させる方法である。また7)のSight Translationは6)の延長で別名FIFO(First in First out、先入先出—商品管理の用語)、頭ごなしの訳、head-cut translationとも呼ばれ、時間的制約の多い通訳という作業の中でできるだけ先に入ってきた情報は直ちに訳出し(記憶のための負担を軽減することになる)、次の情報とcoherenceを持たせながら訳をつないで行く。

(例—田邊1992aより) byを「オキカエ」技法で理由のように訳すと頭から訳出できます。

Scientists believe/ that the lower plants and animals/

科学者によると

微生物は

can adopt to rising UV levels

紫外線の増加に適応できるということです

by developing UV-absorbing cell pigments.

紫外線を吸収する細胞の色素が増えるためです

8) Logical Analysisは文脈の論理的把握能力、さらには予知能力を高める練習法である。これは英文、和文を問わず一文章内のlogicを正確に掴ませるところから始まる。さらにはdiscourseレベルでの文脈展開の仕方を学ぶ。Active Listening、Slash Readingと組み合わせることもできる。

9)のparaphrasing練習はJ-Eの通訳時に適語が思い浮かばない場合に瞬間的に別の言葉で言い換

えることができるようにする練習である。これは通訳の世界でいう「ニゲ」の能力を意識的に身につけさせるものである。

(例―田邊1992aより)

あなたは今、日英同時通訳を行っています、次に挙げてある語句に相当する英語が瞬間的に Recallできなくなりました、さてどう逃げをうちますか。

(1)曲芸師 (2)とんぼ帰り (3)回転イス (4)時限爆弾 (5)全勝 (6)気圧の谷

10)summary練習はE-J、J-Eともに大切な練習である。この練習ではひとまとまりの意味のある discourse単位の文章 (readingかlisteningの形で提示) を指定された言語で要約する。その際、通訳メモを許される場合と、許されない場合がある。いずれにしても受講者はkeyとなる情報を判断し、自らの言葉でまとめなければならない。さらにそのまとめに対して、他の受講者は自由に質問をし発表者の理解度をcheckする。これは談話レベルの解釈・再構築の能力をつけるものでもある。

11)Articulation/Story Tellingでは主に英語におけるdeliveryの訓練を行う。練習はいわゆる vocal qualifierを多く含んだ短文の音読、比較的storyが馴染みのある物語の音読(今年「日本昔話」)、さらにはintonation、sentence stressの違いでどれほど意味が違うかをわからせる認識練習で構成される。各人の音読は必ずテープに録音させ、self-monitorを行わせている。

初級段階の最終練習は12)のdescribingである。これは受講者に身の回りの物、人物、事象やその日のfront cover newsなどを題材に自由に英語で語ってもらう練習である。これもまた録音し、あとで、受講者にself-monitorしてもらい自分がどの段階でつまつたのかを自ら検証させる。

以上が通訳練習の初期の段階に行われる方法を簡単にまとめたものである(スペースの都合で各々の具体的な例題を余り載せることができなかつた。詳しくは田邊 1992a)。次にこれらの通訳法がどのような形で、中等・大学教育などの英語教育の現場に応用できうるか、とりわけコミュニケーション能力の育成にどう寄与できるか、私見を述べることにする。

3. 通訳法とコミュニケーション能力との接点

論考を進める前にコミュニケーション能力について触れておく必要がある。この言葉ほど多用に解釈されている言葉はない。それはコミュニケーションそのものがいろいろな構成要素から成り立ち、さまざまな立場からの言及が可能であるからである。これをここで詳細に論じるつもりはないが、応用言語学に関係すると思われる仮説を思いつくままにあげると、Chomsky(1965)のcompetenceの概念から始まって、CampbellおよびWales(1970)のcognitive psychologyからのcontextの重要性の問題提起、そしてHymes(1978)のsociolinguistic competenceの提起、さらにはWiddowson(1978)のdiscourse観点からのcommunicative ability、Halliday(1979)のfunctionを重視した仮説とめまぐるしい。そして今はCanale(1983)の提唱した仮説 (communication能力とは1)言語学的能力、2)社会言語的能力、3)談話能力、4)方略的能力の4つの構成要素から成る) が一般に受け入れられるようになっている。事実、1993年度から中学校でまず施行される新指導要領の定義も青木(1992)の指摘通り、これに近いものになっている。しかしことさらユニークさを強調するわけではないが、この定義は「ことあげ」しない文化的価値体系の中で育ってきた日本人学習者の特性を踏まえているとは言えないように思う。Hammer、Gudykunst、Wiseman(1978)は1)心理的負担に対応できる能力、2)effective communication能力、3)対人関係を確保する能力をあげているが、日本人が外国人とやりとりをする時に感じる心理的な圧迫感に慣れ、打ち勝つ能力をcommunication能力の構成能力の中に組み入れるべきではなからうか。さらに斉藤(1981)の言う異質なものを受け入れるsensibility、empathyのような感情を持つことも、詳しい意味では能力とは呼べないかもしれないが、実際のcommunicationを行う場合に大切なものである。Savignon(1

983)はこういった能力をcommunicative confidenceと定義している。以上を踏まえここではcommunication能力の定義をCanaleのものにつけ加え、1)広い意味での文法能力一言語学的能力、2)社会言語学的能力、3)談話能力、4)方略的能力、5)心理的能力、6)異文化適応能力の6つの構成要素と仮に定義をすることにする。この6つの構成要素を枠組みとして使い、以下通訳法と英語コミュニケーション能力の結びつきを考えてみたい。

まず(1)QRであるが、これは対象言語(TL)のequivalentを瞬時に想起(recall)し、音声化(vocalize)する訓練であると述べたが、この訓練では何よりも反応の速さ(reflex)、スピードが強化される。反応が速くなるということはコミュニケーション上、種々の効用がある。J-Eの場合素早く語彙をstorageからrecallできるようになれば、その分エネルギーを他のこと、例えばchoice of the wordや構文上の文法的・社会言語学的適切さのmonitorへまわすことができ、またsentence-building上の談話面でのlogical cohesionなどにも注意を払うことが可能になる。さらにこの時間の短縮ということは相手を余り待たすことなく会話の流れにスムーズにひきこむことができ、方略上の心理的余裕にも結びつく。J-Eでは聴きながら相手からの情報を分析しやすくなり、談話の展開に役立つ。これからは一見何でもないことのようにはあるが、EFLという環境で日頃TLを口頭で想起することの少ない学習者にとっては、蓄積された語彙、文法事項を活性化させる良い手段ともなりうる。すなわちQR練習はコミュニケーション能力のおそらくすべての要素にかかわる不可欠の練習ではないかと言える(田邊・馬本1991参照)。

次に(2)のShadowingはまずいろいろな意味での音声的な効果をもたらす。従来のrepetitionではpauseをおいてrepeatするので、自分の認識している音声体系に移して自分のペースでrepeatしたり、視覚的情報(活字)や他人の声に影響されることが多かった。しかしshadowingではほぼ同時に再生をすることになるので他の手段に訴える余裕はなくなる。SLの音声是唯一のたよりとなり、そのため単なるListeningよりもはるかに集中し、SLのリズム・ストレス・イントネーションなどに近い再生をすることになる。ここまでは口ならし的——音声的認識・再生段階での効用であるが、この練習にはもっと深いコミュニケーションに密接した効果がある。即ち、ほぼ同時にSLを聴きながら再生できるということはSLの音声的認識のみならず統語・文法構造の把握、語彙の認識、文脈・談話の流れの把握、談話レベルでの予測さらには情報の軽重の認識などが必要になってくる。ある意味では玉井(1992)の指摘するようにshadowingはreadingにおけるスキーマ的予測・検証の過程に口頭での発話までを加えた、非常にactiveな総合的コミュニケーション訓練と言えよう。その他、この練習の利点としては聴きながら話すというcompoundなchannelの完成(これは練習しだいで誰にでもできる)、感情移入の向上、そして何よりも総合的英語力のウィークポイントの発見がしやすいことも挙げられる。

(3)のActive Listening練習はこのShadowingの延長線上にある活動で、Shadowingと同じく集中力の強化、心理的な緊張感の克服、情報単位の聞き取り、予測能力の強化などに関係する。しかし、何よりも一番の効果は聞き取りの際、pauseを情報のできるだけ短いところにおくことで、学習者に内容理解という点でそれほど困難を感じさせずに(河野 1977)、文法能力・社会言語学的能力などをフルに活用させ、SLのapproximationをTLでreconstructさせることにある。この活動もE-J、J-Eともにおしなべて総合的なコミュニケーション能力を鍛えることになる。

(4)と(5)はともにコミュニケーション能力に直接結びつくというよりも、むしろそれを助ける補助的な、やや技術的な練習であると筆者はとらえている。もちろんコミュニケーションにまったく関係がないというのではなく例えばretention練習は談話能力・方略的能力に関与し、これは記憶力(主に短期記憶)を鍛え、情報の軽重の判断、すなわちこれはすばやく訳出すべきか、またはとっておくべきものか(特にE-Jの際の動詞の訳出)の判断力をつけ、さらにlogicの流れを追

いながら自分の頭の中でSLの文脈を把握するのに役立つ。一方note-takingは情報の整理・区分とともにretentionの上での負担を軽減し、より適切な訳出への補助手段となる。

(6)(7)ともに連続した練習であり、(3)のActive Listeningとも関係している。(6)は文法的切れ目、情報単位ごとの切れ目にslashを入れることにより文法上の知識を即座に活用させる作業となる。また同時にそれぞれの認識情報単位の幅(量)を自覚させることにもなる。その意味で文法能力・談話能力に関係する。(7)のsight translationはある意味では通訳法の要でもあり(同時通訳に直結する)、一般の英語教育の中で広く応用が行われている方法でもある(SIMの一連の英語教材、RIC方式の連続用教材など)。この原理は前述したように頭から訳出して行くということであるが、これによりE-Jの場合、漢文式の帰り読みのクセがなくなり、より英語の発想にのっとった訳出が可能になる。これは非常に重要なことで、たとえ一文であろうと談話単位のものであろうと、英語の表現様式、理論的な展開の仕方を学ぶ近道となる。英語の発想にのって入ってきた情報を理解し(文法能力)、それをさらにまあまあの日本語に訳すわけであるからいきおい日本語はぎこちなくならざるをえないが、cohesionを考え、次から次に入ってくる情報につながりを持たせ(談話能力)、つなぎことばやfillerを巧みに使い社会言語学的にみて適切な訳語を瞬時に思いつかなければならないので、予測も大切になる。こうしてみるとSight Translationは多くの学校で行われている訳出法(その訳の法がわからないことが多い)よりはるかにactiveな作業であることがわかる。さらにE-J、J-Eともに文脈を考えわかりやすい訳出を何より聞き手のために心掛けるので訳出のコツ、即ちツナギ、キリ、クワエ、ニゲなどの技術も学ぶことになるので方略的な力も備わってくる(この方法に関しての詳しい記述は田邊1992b参照)。実はこの方法は何も新しい方法ではなく、昭和の初期以来の直読読解法と呼ばれる訳出法、そして浦口(1927)の提唱したグループメソッドの精神を今の世に復元したものである。またこのような視覚的作業に慣れてくると、聴解の際にも耳に入ってきた情報から処理できるようになる、いわゆる直聴直解である(聴訳式とこの方法を名づけた人ともいる)。

(8)のLogical Analysisはこれまでみてきた各練習の中の特に談話単位での予測力、整合性理論性などを特に鍛える練習である。またつなぎことばや回避表現などのレトリックなどを追い話者の意図を的確につかむ能力を鍛えることにもなる。

(9)のParaphrasingはとりたてて珍しいものではないが、特にJ-Eの過程で適切な訳語が瞬時にRecallできなかつた場合を想定して(通訳時にはこれはcommunication breakdownとなる)、いわゆるニゲをうつ練習、どうその場を切り抜けて行ったら良いのかを積極的に練習する。これは特に文レベルの場合、ひと頃はやった受験のための書き換え問題が、どちらかと言うと受験生がパターンをどれほど認識し、覚え、筆記上応用できるかという点に限られたのと違い(この場合は公式以外の書き換えは排除されることが多い)、自由な観点から口頭で言い換える練習を行う。これは自らの表現力のcheckとなるばかりか、心理的な意味での防衛線ともなる。

(10)Summary練習はコミュニケーションの各能力を総動員しておこなう練習である。力点は情報の把握の仕方その再構築・表出の仕方に置かれる。

(11)および(12)の練習は主に訳出時のpresentation、deliveryの仕方に関係する練習であり、これも総合的なコミュニケーション能力に密接に結びついている。

4. 結語

以上、基本的な通訳法を概観し、それぞれの通訳法がコミュニケーション能力のどのような側面に関係し、どのような力をのばすかということ述べてきた。このように通訳法はコミュニケーション能力の全般的なものに深くかかわり、それを学ぶことでコミュニケーション能力の様々な側面が鍛えられるということ述べてきた(それをまとめたマトリックスは資料参照)。

かつて通訳と言う技術はよくShannon-Weaver (1947) のdecoding-encodingというコミュニケーションモデルが引き合いに出されて説明されることが多かったが、この枠組みの中では通訳者は異なる記号の解釈・記号化を受動的に機械的に行う者としかとらえられていなかった。しかし最近のコミュニケーション研究の観点からは(Sperber and Wilson 1986、Hatch 1992)、通訳という作業は単なる言葉の置き換え、解釈・記号化の作業だけではなく、非常に集中した状態で話者の情報を正確にとらえ、理解し、選別し、談話・社会言語学的レベルで情報を処理し、聞き手の文化コードに合わせて、その情報を訳出する、そしてこのようなプロセスを瞬時に連続的に繰り返さなければならない総合的な異文化間の技術であることがわかってきた。さらにそのプロセスを注視すれば通訳者は絶えず、自らが訳出する情報が、話者と聞き手にどうかかわるか

(Relevance)、その役割の重みを瞬時に判断し、自分のスキーマもしくはFrame of Referenceとつきあわせる形でその情報の訳出をRecallし、それが言語的社会言語的、談話の流れの中でもっとも適切かつeffectiveであるか仮説一検証し、口頭で適切な音声channel(リズム・ストレス・イントネーション)にのせて訳出していると考えられる。即ち、通訳は決して受身的な作業ではなく、むしろかなりactiveに情報のやりとり(communication)にかかわる作業なのである。

英語教育の中で、それまで受身的に蓄積した能力を視覚的側面で活用するだけではなく、発信型の能力に転換できるようになることが求められるようになって久しいが、通訳法はこのようにまちがいなくusageをuseに結びつける有効な方途を提供するものである。もちろんいきなり中学校・高等学校・大学などの教育現場にこの方法をそのままの形で応用するのは早計ではあるのが、コミュニケーションという情報のやりとりに積極的にかかわる能力を培うことを現行の英語教育の最大の目的と考える時、通訳法は注目に値する技法である。これからもこの方面への関心はますます続くことになろう。

参考文献

- 青木昭六(1992)「6 英語教育とコミュニケーション・コンピタンス」阿部(編):93-116.
青山静子(1988)『主婦たちの英語奮戦記』東京:中経出版。
——。(1989)『主婦の英会話ペラペラ入門』東京:中経出版。
浅井達夫(1976)「通訳講座 通訳入門(1)~(3)」『月刊国際コミュニケーション』6月号-8月号
東京:ゾディアック。
朝日新聞学芸部編(1985)『英語とつきあう』朝日ブックレット55東京:朝日新聞社。
阿部美哉(編)(1992)『国際文化学と英語教育』東京:玉川大学出版部。
安西徹雄(監修)片岡しのぶ、金利光(1988、1989)『英日翻訳トレーニングマニュアル』1、2 東京:
バベルプレス。
伊藤嘉一(1979)「現代的英文解釈論」『英語教育』Vol. XXVII No. 3:24-26。
浦口文治(1927)『グループ・メソッド』東京:生活文化社。
大島真(1992)『談話文法研究』東京:リーベル出版。
大谷立美(1984)「通訳教育に関する一考察 通訳者に求められる資質と条件」
『関東学院女子短期大学短大論叢』第75集:24-38。
——。(1988)「通訳教育に関する一考察 職業としての会議通訳者の現状と将来」『関東学院女
子短期大学短大論叢』第79集:13-28。
小倉一郎(編集責任)(1990)『一般の対談や座談会及びその通訳に必要な語句と口語表現』東京:小
倉図書。
笠島準一(1987)『RIC方式英文読解法』東京:日本英語教育協会。
加島祥造、志村正雄(1992)『翻訳再入門』東京:南雲堂。

- 金山宣夫(1964)『英語通訳ハンドブック:会議通訳の常識』東京:原書房。
- 金山宣夫(編)(1978)『Interpreter's Training Course』東京:日本通訳協会。
- 河上道生(1972)「通訳はいかにするか—通訳法の実際—」『英語研究』研究社:2-5。
- 。(1973)「ここが違う同時通訳と翻訳」『英語研究』5月号 研究社。
- 『College Super ELMer』東京:東京SIM 外語研修所。
- 楠幸治(1991)「音読の一形態としてのシャドウイングの導入について」『能力、適性、興味・関心等において、多様化している生徒一人一人の能力を最大限に伸ばす学習指導について』平成2年度教育実践研究高等学校外国語研究グループ報告(広島県):41-44。
- 國弘正雄(1966)「同時通訳者の悩み」『朝日新聞』10月8日。
- 。(1968)「会議通訳に思う」『英語文学世界』10月号。
- 。(1969)「ことばは生きている—通訳ブースを拷問室と呼ぶ」『放送文化』3月号 東京:日本放送出版協会
- 。(1972)『英語の話し方』東京:サイマル出版会。
- 。(1972)『国際英語のすすめ』東京:実業之日本社。
- 。(1978)『TALK SHOW』東京:桐原書店。
- 。(1981)『落ちこぼれの英語修業』東京:日本英語教育協会。
- 。(1982)『國弘正雄自選集(1)異文化のかけ橋として』東京:日本英語教育協会。
- 國弘正雄・鳥飼久美子(1982)『英語で何をやる』東京:日本英語教育協会。
- 國弘正雄・西山千・金山宣夫(1962)『通訳 英会話から同時通訳まで』東京:日本出版協会。
- クリスタル・デイビット(原著)風間喜代三・長谷川欣佑(監訳)(1992)『言語学百科事典』東京:大修館書店。
- 小林薫(1967)「同時通訳事始」『プレジデント』5月号 東京:プレジデント社。
- 。(1982)『同時通訳の発想による英語力シェイプアップ』東京:グロービュー社。
- 河野守夫(1976)「Listeningの過程・概観」『外国語研究III』神戸市外国語大学研究所。
- 。(1977)「Listeningの過程・概観」『外国語研究IV』神戸市外国語大学研究所。
- 河野守夫・沢村文雄(編)(1985)『Listening & Speaking—新しい考え方—』京都:山口書店。
- 小正幸造(1989)『すぐれた英語翻訳への道—創造する翻訳者が使う技法集—』東京:大修館書店。
- 栗田晃穂(1980)『通訳になるには』東京:ペリカン社。
- 近藤政臣(1980)「異文化間コミュニケーションの目ざすもの」『大東文化大学紀要』第18号(社会・自然科学):1-14。
- 。(1990)「会議通訳者のための集中再教育—担当の経験より」『大東文化大学紀要』第28号(人文科学):1-15。
- 斎藤美津子(1964)「同時通訳の課題—オリンピック国際会議の経験から」『読売新聞』11月7日。
- 。(1966)『話しことばの科学』東京:サイマル出版会。
- 。(1969)「同時通訳」『言語教育と関連諸科学』言語教育叢書第1期5巻東京:文化評論出版。
- 。(1972)『きき方の理論』東京:サイマル出版会。
- 。(1977)「同時通訳というもの」『朝日新聞』12月1日。
- 。(1981)「通訳者になるための適正・資質 継続は力なり」『別冊 The English Journal 通訳事典』東京:アルク。
- 佐上緑(編)(1984)『通訳術教本第1部』山口県立岩国高等学校通訳術クラブ教本。
- 『Super ELMer』東京:東京SIM 外語研修所。
- 篠田顕子・新崎隆子(1990)『今日からあなたの英語は変わる』東京:日本放送協会。

- . (1992) 『英語は女を変える』 東京: はまの出版.
- 白野伊津夫(1989) 『RIC方式 英語の新聞速読法』 東京: 日本英語教育協会.
- 鈴木崇生(1991) 『英会話習得法』 東京: 三一書房.
- 田所信成(1975) 『英語の学び「構えと発声」』 東京: 学書房.
- 田中典子・ファロン、ルース(1990) 『RIC方式 英語スピーキング』 東京: 日本英語教育協会.
- 田邊祐司(1992a) 『英語コミュニケーション能力向上のための実践通訳教本』 文部省広島地域リカレント教育バイリンガルコース(日英通訳)教科書.
- . (1992b) 「異文化間コミュニケーション・スキルズの上達をめざして: 通訳者の英日聴解・訳出ストラテジー」 国際英語コミュニケーション研究所 第22回月例研究会発表資料 (『IRICE PLAZA』第3号に所載予定).
- 田邊祐司・馬本勉(1991) 「語のRecallをめぐる一語彙指導の観点から」 『教育学研究紀要』 第37巻第2部 中国四国教育学会: 166-171.
- 谷口賢一郎(1987) 「スキーマ理論を利用したリーディングの指導」 『現代英語教育』 5: 11-15.
- 谷本秀康(1988) 『異文化コミュニケーションと通訳者の役割』 東京: 英潮社新社.
- 玉井健(1992) 「“Follow-up”の聴解力向上に及ぼす効果および“Follow-up”能力と聴解力との関係」 『STEP BULLETIN』 Vol. 4 東京: 日本英語教育協会.
- ダン上田(不明) 『同時通訳の構造』 東京: SIM外語研修所.
- 外山滋比古(1980) 『外国語の読みと創造』 東京: 研究社出版.
- 長井善美(1967) 「会議通訳」 『ELEC Bulletin』 11.
- 長崎弦弥(1984) 『英文ライティング頭の体操』 東京: The Japan Times.
- . (1992) 『長崎弦弥の英語の攻め方』 東京: アルク.
- 長沢寿夫(1990) 『中学3年分の英語が音読するだけでドンドン身につく』 東京: 明日香出版社.
- 中村保男(1982) 『翻訳の秘訣 理論と実際』 東京: 新潮社.
- . (1992) 『現代翻訳考』 東京: The Japan Times.
- 中村保男、谷田貝常夫(1984) 『英和翻訳表現辞典』 東京: 研究社出版.
- 西村喜久(1988) 『西村式 英語が前から3週間で30倍速く訳せる本』 東京: 明日香出版社.
- 西村千(1966) 「通訳恐るべし」 『中央公論』 12月号.
- . (1970) 『通訳術 カタコトから同時通訳まで』 東京: 実業之日本社.
- . (1972) 「同時通訳—是か非か」 『英語研究』 東京: 研究社14-15.
- . (1977) 『英語のでこぼこ道』 東京: サイマル出版会.
- . (1979) 「直訳を避ける確かな作文を一企業内の日英翻訳その問題点」 『翻訳の世界』 12月号 東京: バベル出版 45-49.
- . (1979) 『通訳術と私』 東京: プレジデント社.
- . (1991) 『新・誤解と理解』 東京: サイマル出版会.
- 日本コンベーションサービス通訳部(1991) 『プロが明かす英語上達のコツ』 東京: 講談社.
- 日本通訳協会(編)(1976) 『英語通訳への道』 東京: 大修館書店.
- . 大谷立美・石井省三(1991) 『新通訳検定試験突破』 東京: 三修社.
- 橋本満弘(1992) 『英語コミュニケーション論—実践力養成に向けて—』 東京: 学書房.
- 林春江(1982) 「同時通訳のメカニズム」 『Exodus』 4 神戸市外国語大学.
- 平橋隆臣(1992) 「同時通訳の秘訣と技術」 1992年度中国地区学生英語連盟サマーコース資料.
- 廣政愁一(1992) 『英字新聞が1週間で読める』 東京: 明日香出版社.
- 福井治弘・浅野輔(1961) 『英語通訳の実際—初歩から同時通訳まで』 東京: 研究社出版.

- 『別冊 The English Journal 通訳事典』(1981~1984)No.1~4 東京:アルク。
 松尾式之(1981)「実践トレーニング講座」『別冊 The English Journal 通訳事典』No.1 東京:アルク。
- 松本道弘(1987)『速聴の英語』東京:プレジデント社。
 宮下忠雄(1992)『聴訳式英語学習法のすすめ』東京:総合法令。
 向鎌治郎(1987)「通訳の学習法」『時事英語研究』2月号:25-31。
 八島智子(1985)「通訳術の分析」河野・沢村(編)。
 ——。(1988)「通訳訓練の英語教育への応用 I shadowing」『英学』Vol.21平安女学院短期大学。
 山本雅代(1991)『バイリンガル—その実像と問題点—』東京:大修館書店。
 ユニ・カレッジ(編)(1987)『英語を読む技術』東京:ごま書房。
 三浦孝(1992)『英語コミュニケーション授業の実際』東京:第一学習社。
 村松増美(1964)「同時通訳ができるまで」『日本経済新聞』7月16日。
 ——。(1977)『私も英語が話せなかった』東京:サイマル出版会。
 ——。(1979)『続・私も英語が話せなかった』東京:サイマル出版会。
 ——。(1985)「通訳の英語・翻訳の英語」『高校英語教員ぶつくれつと』No.3東京:三省堂。
 ロンプ、カトー 米原万里訳(1972)『わたしの外国語学習法』東京:創樹社。
- Anderson, R.B.(1975) 'Perspectives on the Role of the Interpreter.' in Brislin (eds.) *Translation Applications and Research*. New York:Gardner Press:208-228.
- Berko, R., A.D. Wolvin and D.R. Wolvin(1989) *Communicating:A Social and Career Focus*. Boston:Houghton Mifflin Company.
- Brislin, R.B.(1980) 'Expanding the Role of the Interpreter to Include Multiple Facets of Intellectual Communication.' *International Journal of Intellectual Relations*. 4:137-148.
- Campbell, R. and R. Wales(1970) 'The Study of Language Acquisition.' in Lyons, J.(eds.) *New Horizons in Linguistics*. Harmondsworth:Penguin.
- Canale, M.(1983) 'From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy.' in Richards and Schmidt(eds.) *Language and Communication*. London:Longman.
- Canale, M. and M. Swain(1980) 'Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing.' *Applied Linguistics*. 1:1-47.
- Hatch, E.(1992) *Discourse and Language Education*. Cambridge:CUP.
- Hatim, B. and I. Mason(1990) *Discourse and the Translation*. London and New York: Longman.
- Hymes, D.(1974) *Foundations in Sociolinguistics*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.
- Nida, E. A. and C. R. Taber(1969) *The Theory and Practice of Translation*. Leiden:E.J. Brill.
- Savignone, S.(1983) *Communicative Competence:Theory and Practice*. Mass.:Addison-Wesley.
- Shannon, C.E. and W. Weaver(1947) *The Mathematical Theory of Communication*. Illinois: University of Illinois Press.
- Sperber, D. and D. Wilson(1986) *Relevance:Communication and Cognition*. Oxford:Blackwell.
- Widdowson, H.(1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford:OUP.

資料

各通訳法とコミュニケーション能力との接点

+ 非常に深くかかわっている △ ややかかわっている ▽ あまりかかわっていない - かかわらない

	1)言語学的	2)社会言語	3)談話能力	4)方略的	5)心理的	6)異文間
1)QR	+	+	+	+	+	△
2)Shadow	+	△	+	△	△	△
3)Active	+	△	+	▽	+	▽
4)Reten	+	△	+	+	+	▽
5)Note	+	+	+	+	+	-
6)Slash	+	▽	+	+	-	+
7)Sight	+	+	+	+	+	+
8)Logic	+	+	+	+	+	+
9)Para	+	△	+	+	+	▽
10)Sum	+	+	+	+	-	▽
11)Arti	+	△	+	+	+	+
12)Des	+	+	+	△	+	△